



「海の民」に 心引かれて

一九八一年、もうちょうど二十年前のこと、トルコへの赴任を前にして、トルコに関する図書を捜し歩きました。今では大きな書店など、トルコのコーナーが設けられるほどに多くの書物が刊行されていますが、当時はまったく事情が違いました。数えるほどの種類しか見当たらない、その中の一冊（今その本は手元になく、書名も著者も定かではないのが残念ですが）の中に、「海の民」の記述があったのです。トルコといえば、何となく「陸」のイメージが強かったからでしょう、ふと印象に残りました。ヒッタイトの末裔だったか、ヒッタイトを滅ぼした民族だったか、いずれにしてもヒッタイトと関係がある民族が、この半島の南西部に勢力を張ったことを、知識として持っていました。

だがそれも現役時代の日常の忙しさに紛れて、いつしか遠いものになっていましたが、あるとき、JICAの鉱物探査の専門家各地を回っていられた阿部正行氏のお宅で、海に臨んだ数多い石棺の写真を見せてもらって、関心が再燃しました。それでもそのときは、大変辺鄙な

ところと聞かされてもいたので、半ば叶わぬ夢と思っていたように記憶しています。そうしているうちに、八五年の夏近く、帰任が決まってしまうと、東部と同じく相前後して、一度その地方をこの目で見ておきたいとの思いが、油然と甦ってきたのです。決行、ちょっと大げさですが、もう滞在もあと僅か、休暇が自由に取れる身分でもなかったため、パイラム休みを利用して、思いきってダラマン空港への切符を手にしました。数日の小旅行が、予想以上にすばらしいトルコの思い出を作ってくれたことに感謝して、その後まもなく帰国しました。

もちろんそのときには、この訪問が最初で最後と思っていたのですが、時の経過につれ、時間ができるとともに二度、三度と回を重ねるようになりました。これから案内する全部の場所というわけではありませんが、都合七、八回はこの海岸線を走ったことになりました。せっかくトルコに滞在される皆さんは、ぜひ一度は少し無理をしても、ダラマンから、あるいはアンタルヤから、車を走らせてください。もちろんバスとタクシーをつないでも、じゅうぶん周遊可能です。

リュキアを知る

ほとんど予備知識もなしに飛び出した私たちでしたが、やがてこの地方が、紀元前の昔から「リュキア」と呼ばれていたことを知りました。中部アナトリアのヒッタイトの遺跡ハットゥシャシュで見された、膨大な数の粘土板の中に「ルツカ」という地名があり、これがリュキアより古い時代の呼び名ともいわれています。「ダルワ」と読める都市名もありません。これは今の遺跡名では「トウロス」だそうです。とにかく今のフェティエからアンタルヤにかけての海岸線から、西タウルス山脈の溪谷にかけて都市が興り、その連合国家が形成されていたようです。

ヒッタイトと交渉があったということは、紀元前少なくとも十二世紀以前に遡ります。現在発見されている最も古い遺物は、遠く紀元前三十世紀の初期青銅器時代に遡るそうです。よくわかりませんが、ともかくのちにギリシャ人がやって来て、自分たちの神話の中にこの地方を組み込んでしまいました。有名なヘロドトスも、リュキア人はクレタ島から来たと言っているそうです。とにかくその出自は何であれ、リュキア人がこの辺一帯に特殊な



フェティエ市街。

文化圏を作っていたことは、一度足を踏み入れたならば誰の目にも明らかでしょう。

前後的確な脈絡をつけることは、私の知識能力を超えますが、最近「甦るトロイア戦争」というドイツの学者の書いた本を翻訳で読んでみると、「海の民」についての詳細な記述があつて、二十年前のおぼろげな記憶が甦りました。「海の民」という言葉の由来は、エジプトのテーベにあるラムセス三世の葬祭殿の碑文にあるのだそうです。この「島々から」来た九つの民族が、当時のスーパーパーワード、アッシリアやヒッタイト、エジプトなどの権力の空白を衝いて、ヒッタイトなどアナトリア半島やオリエント各地の国々を倒し、ギリシャやエジプト王国をも襲撃したということが記されているとか。「青銅器時代のバイキング」と呼ぶ人もいるようですが、言い得て妙だと思えます。

この本の著者は、彼等の出身地をトリアからリュキアにかけてのエーゲ海沿岸だと推定しています。つまりリュキア人も当然その一員だったということです。もしこの「海の民」がヒッタイトを滅ぼしたというのなら、ヒッタイト人たちが、この地方へ連れてこられたということもあり得るでしょう。つまり末裔が住みつ

いたかもしれません。そしてすこし余談になりますが、いわゆるトロイ戦争は、敵対していた二つの勢力、ミケーネ期のギリシャと「海の民」との間の最終戦だということですよ。

リュキアが栄えたのはこの後数百年でしようか、紀元前六世紀にはペルシアの侵攻を受けています。その頃書かれたヘロドトスの「歴史」の中にも、強力なペルシア軍に対するリュキア人が、首都クサントスに立てこもって奮闘した様子が描かれているようですが、今その遺跡は主に欧米の観光客で賑わっています。

それ以降のリュキアはアレクサンダーやエジプトのプトレマイオス朝、そしてギリシャ、ローマとその主人を変えて、もはや独自のものは失われました。今域内の各地には、古代リュキアの建造物とともに、ローマ、ビザンティン東ローマの遺跡も数多く残っています。なおイスタンブールの考古学博物館で見られる、有名ないわゆる「アレクサンダーの石棺」や「リュキアの石棺」などは、遠くフェニキアのシドンで発掘されたものですが、その様式からして、リュキアの技術者が製作に関わったのではないかと指摘する学者もいます。現地を歩いたのちに博物館に足を運べば、また違った感懐が浮かぶことですよ。

フェティエからクサントスまで

フェティエからクサントスまで どうやら舌足らずの歴史講釈が長くなってしまったようです。そろそろリュキアへ足を踏み入れましょう。リュキア地域に入るには、東はアンタルヤ、西はフェティエ（空港はダラマン）からの、二つの方法があります。どちらでもよろしいのですが、アンタルヤはご存知の通りの観光都市、そして最初の訪問者は、どうしても足が自然に東のローマ大遺跡の方に向かう、また西も現在は数十キロすっかりリゾート化してしまっているので、やや感興が薄れるくらいがあります。西のフェティエから入る方が、より効率的に、一挙にリュキアの雰囲気には触れることができるでしょう。

ただ第二回で紹介する予定のフィニケとミラの間、今なお道が狭くカーブが多いので、東から西向きの方が山側を走れるだけに、私の場合はちょっと気が楽です。反対向きだと何度か海に突っ込みそうな恐怖に駆られました。運転の腕に自信がありなら、どうということもないでしょうが。



フェティエ市街地の道の真中に鎮座するリュキアの石棺（柱墓）



フェティエ市背後の丘に残る岩窟墳墓（家墓）群。

フェティエ

フェティエ さてダラマン空港からフェティエまで、すでにエーゲ海岸の風光をご存知の向きには、格別の感興はないかもしれません。私の場合最初の旅は、長く住んでいた乾燥地帯のアンカラから出かけたので、やはり一種の感慨がありました。松林の間から洩れてくる青い海と静かな島々の景色は、絶景とまではいきませんが、当時はそれなりの癒しを与えてくれたことでした。甲の高い亀と山道で出会って、はっとして車を止めたこともありました。

遺跡地図などを見ると、フェティエは昔（中世以降に何度も変わっているようですが）テルメッソスと呼ばれていたことが分かります。ただここで注意、アンタルヤの北郊の古代の山上市テルメッソスと混同しないようにお願いします。こちらは「L」と「R」の違いがあります。こちらは「L」、向こうは「R」です。ともあれ古代から栄えた現在の町は、これといった特徴もないのですが、嬉しいのはリュキアを代表する遺跡群が、町の中心から歩いて行けるところにあることです。あなたが街を歩けばきっと子供たちが寄ってきて、「メザル（墓）、メザ

ル」と連呼することでしょう。

墳墓は大きく分けて二種類、一方は断崖に横穴を穿ち、前面を生前の家の形を彫って飾ったもの（今後「家墓」と呼びます）、もう一つは直立した「柱墓」です。前者はいくつかの類型に分けられます。大きく宮殿風なのは高貴な人のお墓、それよりは小さく家の形をしたものは有力者たちのものでしょう。彫り飾りのない四角い穴だけのものもありますが、これはさらに位の低い人のお墓でしょうか。この宮殿風の前面の浮彫りがギリシャ風であることは、素人目にも明かです。様式としてはイオニア式だそうで、建設は紀元前五世紀から三世紀くらいだそうです。すから、ギリシャ人の植民以降のものでしょう。なお「家墓」は必ずしも横穴・レリーフ式ではなく、独立した家の形に造られたものもあります。

実はまったく関係のない、私の住んでいる鎌倉にも、山腹、山裾の岩をくりぬいた横穴式の墳墓（群）があります。鎌倉時代の鎌倉にしかない形態だと聞いていますが、これに「やぐら」という呼び名が付けられています。私は素人学説で、「岩窟（いわぐら）」がなまったものと推定していますが、あるときタウン紙に頼まれて、「トルコのやぐら」という題の小文を書いたことがあります。もちろんリ



フェティエ近郊の緑の入り江「オリュ・デニズ(死海)」
屈曲の多い海岸の入り江は格好の海水浴場となっている。

ユキアの方がはるかに壮大で、念入りに造られています。

後者の「柱墓」はさらに印象的です。くりぬかれた直方体の上に屋根付きの石棺が載っています。そしてそれが町のあちこちに、まことにさりげなく立っているのが嬉しい。このあとあちこちで、いろいろなたずまいの中にこの柱塚を見出だすこととなりますが、その最初の出会いがフェティエの市街地だったのです。これもやはり紀元前五世紀以降といわれますが、葬られた人はどんな人でしょう。断崖墳墓とどう違うのでしょうか。ご存知の方に教えてもらいたいところです。

なおこの町には、第一次大戦後のトルコ・ギリシャの住民交換で、ギリシャ人たちが一夜にして村を去ったために、まったくのゴーストタウンと化した、カヤの部落が残されています。こうした場所を「名所」として設定するのはどうかとも思われますが、現代史を体で認識するには役立つでしょう。

プナラ

最初の旅のとき、私はプナラの標識を横目に見て過ぎました。幹線からの距離と悪路を考えて、無理をしなかったの

です。そしてその十年後の九五年、東アンタルヤを発してのドライブの途中、ふたびその標識を見たときには、もう迷わず田舎道へ車を乗り入れました。少々写りの悪い写真でしたが、文字通り屏風状の岩壁に連なった「ブドウ状」の墳墓群を、ぜひこの目で見てみたかったのです。十年前よりはきつとよくなっていたのでしょうか、進入路はかなりの悪路でした。ほとんど人里も離れた山中、それでもちゃんと観光省の「お役人」が頑張っていました。そこは谷間のちよつとした平原でした。案内書によればプナラは、クサントスを中心としてリュキア連合を

構成した、主要な六都市の一つだったそうです。

さてこの場所での圧巻は、何といても、西方の切り立った岩壁の頂上から下方に向けて抉られた横穴墳墓群です。上下に連なる四角い穴は何列かに横にも広がり、その合計数はゆうに百を超えるでしょう。平原の海拔は三五〇メートルですが、岩壁の最高部は七〇〇メートルを超えるそうです。そしてそこはやはり平原になっていて、最も初期の都市跡があるようです。ちよつとそこまでは行けませんが、この横穴を掘るためには、当然上からロープでぶら下が



プナラ、断崖にブドウ状に連なる墳墓群の奇観。



クサントスに残る石組み（ローマ時代？）

クサントスに残る石組み（リュキア時代）



つても作業しなければいけないでしょう。大変な造作です。靈魂を天上に近く祭りたいたいということかもしれません。正直何を好んでという感じが拭えませんが、もちろん「家墓」も各所に残っています。円形劇場も東のかたに見えていますが、これは紀元前二世紀頃の建築とか。ローマ期以降の建造物も多く見られます。ともかくこうした場所に来ると、いやでも歴史の移り変わりに心が引かれます。リュキアの遺跡の中でも、特に秘景色が濃い場所だと感じました。

クサントス

クサントス、（今トルコ名はクヌクですが、クサントスで通用します）はリュキアの中心都市で、発掘も最も進んでいるかもしれません。幹線から標識にしたがつて低い丘を上っていけば、すぐに左手に二つの形の違う石造物が目に入ってきます。その一つは典型的なリュキア式「柱臺」ですが、もう一つはギリシャ神話に出てくる、上半身が女性で翼を持つ怪物ハーピーの名前を冠したモニュメントです。時の王とその王妃に対して、子供や一族が捧げた賛辞が刻まれているようです。その浮彫りはリュキア芸術の最高

傑作といわれ、オリジナルは大英博物館に保存されているとか、目の前のものは石膏作りの模造品でした。

クサントスの名前はトロイ戦争を歌った叙事詩イリヤッドの中に出てくるそうです。前述したように、リュキアを含む「海の民」連合軍は、トロイの側に立って参戦しました。その連合軍の指揮官が、遠くクサントス川の地方から来たと言われています。この川、今トルコ名でエシエン・チャユは美しく、ゆったりと丘を回って流れています。この川が存在が、クサントスを中心都市にした所以かもしれません。

たくさん建造物が見られますが、管理のおじさんが頼みもしないのにしてくれた説明が、記憶に鮮明です。それは石垣の様式の違いです。写真で明らかのように、規則的な形の石組みと、ほとんど自然のままの形状を巧みに組んだものが並んでいました。悲しいかな写真を撮って記録を忘れていました。不規則な方が、後世ローマ期のものであったように記憶しています。どうでしょう。専門家にはすぐ判断がつくでしょう。

クサントスについて、ペルシャ侵攻時の悲しい物語が残されていることは前述しましたが、その後紀元前一世紀にも、ローマの内戦に絡んで苦難の出来事がある



静かなレトゥーンの遺跡

りました。ブルータスから兵員や抛出金の上納などで厳しい注文を付けられ、これを拒否して武力攻撃を受けたのです。籠城そして善戦むなしく、大半の住民が殺害され、わずかに一五〇家族が生存を許されたのだそうです。小国が独立を全うすることの難しさは、いつの世でも変わりありません。

レトゥーン

せっかくクサントスまで行ったなら、近所のレトゥーンにもちよっと立ち寄りてください。クサントスから五キロほど東へ寄ったところ、幹線の海側にあります。レトゥーンというのはギリシャ神話の中で最高神ゼウスの愛人、彼女とその息子アポロおよびアルテミスのために設けられた祭壇の礎石が、静かに水に浮かんでいます。円形劇場その他の廃墟も残っています。訪れる人も少ない地味な遺跡ですが、それだけにちよっと一服するには、賑やかなクサントスよりいいかもしれません。

私の案内も一服して、次回はさらに東へ走って、とりわけ「海の民」を感じさせる海岸、海中の遺跡を中心に遺跡を歩いてみましょう。

* まだお読みになっていない方、「ビル・バシカ・イスタンブル」二八号から三三号にかけて連載された赤松順太氏のトルコ北東地方シリーズ「奥の細道」も是非お読み下さい。

筆者のプロフィール

赤松順太（あかまつじゅんた）
昭和6年、愛媛県宇和島市生まれ。
京都大学法学部卒業。
三井物産在職中の昭和56年より
4年間トルコに勤務。退職後も数回渡航し、
長期の滞在経験あり。
＜著書＞『新トルコ風土記』
『アナトリア旅情』（写真集）
『トルコ生活紀行—トルコで日本を考える—』
その他雑誌等に寄稿多数。

